



TITLE:

京都外科集談会抄録 + 会員動静

AUTHOR(S):

---

CITATION:

京都外科集談会抄録 + 会員動静. 日本外科宝函 1954, 23(2): 197-200

ISSUE DATE:

1954-03-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/206066>

RIGHT:

# 京都外科集談会抄録

昭和 28 年 12 月 例会

## (1) 睪丸の軸捻転を思わしめた 2 例

深 田 斉 迪

経験した 2 例は手術時に捻転を確認し得なかつた事及び明確な壊死像を欠いている点を除けば、睪丸回転症として報告されている症例と大同小異の所見を呈するものである。併し第 1 例に於て尿沈査に膀胱炎の所見を認めた事は其に依る普通の副睪丸炎、睪丸炎を否定し得ない。第 2 例に於ても尿所見の異常はなかつたが上述の 2 疾患を除外出来ない。回転症と鑑別を要する其他の疾患は概ね除外出来る。茲に於て両例共誘因として多少とも過労のあつた事及び回転症の患者は一般に疼痛発作の経験を屢々有すると云う報告に着目すると、只今の例に於て捻転が短時間続き元に戻つたと云うことも考えられる。

要之診断が確実な場合は手術的療法が理想的かも知れぬが、逆に回転症に対して確実な診断法がなく且比較的稀な疾患である点から見れば、既に疼痛発作継続時間が壊死になる位である場合には、普通の炎症或は既に捻転が元に戻つた後ではないかと見て一応保存的療法を試みて良いと考える。

## (2) 外科領域に於けるビタミン C 大量使用の止血効果とショック時応用に就いて

麻 田 栄, 柴 垣 進

手術時 17 名の症例に V.C 1000~3000mg を静注した結果、出血並びに凝固時間値は注射後 5~15 分で著明に短縮するものが 7 割に及んだ。併し 1000mg 使用例と 3000mg 使用例では両者間に大した変動は認められず、V.C の止血作用には一定の限界がある。非手術時使用例でもやはり出血時間値及び凝固時間値は V.C で短縮はするが、この際は手術時使用と異なり注射後 30 分~1 時間を要した。

又 4 例の手術後のショック患者に V.C の大量静脈内注入を試みたところ、1 過性ではあるが、血圧上昇、脈圧増大を来し、全身状態を良好ならしめ、輸血、輸液を行う迄の中つぎとしての応用は意義あるものと考えられる。

## (3) 廻盲部肉芽腫（寄生虫性？）の 1 例

美 馬 潔

前後 3 回に亘りアメーバ赤痢に罹患し、その間 5~6 回のマラリア発作を繰返した患者の廻盲部に孤立性の腫瘤を形成した 1 例で、レ線透視の結果、廻盲部癌の診断のもとに右側半結腸切除術を施行した。然るに組織学的検査の結果、肉芽腫であることが判明するに

至つた。而して既往歴等と併せ考え、その本態が恐らくはアメーバ赤痢のアメーバ寄生による廻盲部肉芽腫ではなからうかと思われる 1 例を報告した。

## (4) 慢性脾臓炎に対する脾頭部切除術

久保田 信 孝

上腹部、右季肋部、腹側部、背部痛等を訴え、その度毎に十二指腸潰瘍、術後性癒着症、術後性空腸潰瘍、肋間神経痛等の診断を受け、度重なる手術にも拘らず軽快しなかつた患者に対し、慢性脾臓炎との診断のもとに、脾頭部十二指腸切除、胆嚢、総輸胆管切除、空腸空腸端側 Y 型吻合、脾空腸端側吻合及び肝管空腸端側吻合術を施行、更に術後 6 日目上腹部正中切開創中央部に脾管瘻を形成した結果、激痛発作の全く消失した 1 例を経験した。剔出標本により遷延性慢性脾臓炎と十二指腸潰瘍の存することを知つた。

## (5) 珍らしい馬尾神経腫瘍の 1 例

小野村 敏 信

両下肢、腰部の疼痛を来すと共に、両下肢の運動並びに知覚麻痺を来した患者に対し、第 I~IV 腰椎の椎弓切除術を行い、第 III 腰椎の高さを中心に馬尾神経に囲まれて硬膜腔を殆ど一杯に満たす拇指頭大の腫瘤を剝離剔出した。組織学的検査の結果、之が馬尾神経部に発生した皮様嚢腫であることが判明したものである。尙本症例は術後の知覚、運動機能の恢復は極めて速やかであつた。

## (6) 7 種類の内部畸形を有する 1 例

岡 田 守

最近、腎盂膀胱炎で来院した患者に右腎欠損、左腎腰部変位、右癆残複角を有する双角子宮、膣狭少、膣前円蓋欠除、総腸間膜症、頸肋の 7 種類の畸形の存する事を知り、その発生機序に就いて考察を加えた。

## (7) 骨盤骨折の骨盤腔内を検じ得た 1 例

小寺 寿 治, 小田 忠 良

交通事故により側方より右腰部を強打し、右下腿骨骨折、第二腰椎横突起骨折、鎖骨骨折の他、脾臼骨折を伴える Malgaine 骨折の 1 例を経験した。本症例は入院時腹腔内臓器損傷の疑ありしたため、開腹術を施行したところ、術中ショック状態に陥つた。従つて骨折を伴う様な患者では、既に骨折だけでも大なる侵襲であり、之に更に外科的手術侵襲を加えることは思慮すべきで、臨床所見、外力作用方向、骨折部位等に就いて充分検討した上で、慎重に救急処置を施行すべきで有ると考える。

## (8) 漿膜縫合の必要性の境界

原田直彦, 岡田 守

最近胃破裂の結果, haemorrhagic shock状態で入院した患者に対し, 手術施行, 漿膜縫合を行わず, 単に Albert 全層縫合のみで, 而も連続縫合一層のみで良好な経過を辿った胃切除例を経験した。斯る緊急な手術の場合, この様な原則的な操作を廃止したことの是非について御批判を仰ぎ度い。

## (9) ヘパトームによる胆道閉塞症の1例

河村健次郎

高度の黄疸, 肝臓腫脹, 胆嚢腫脹を伴っている患者に遭遇し, 膵頭部癌の診断のもとに手術を施行したが, 胆嚢, 総輸胆管内に凝血塊及び壊死組織片と思われるものを含んだ, 暗赤色の液体のみが多量に貯溜して居り, 総輸胆管, 十二指腸開口部の閉鎖, 乃至は狭窄は勿論のこと, 胆道, 胆嚢内に結石, 腫瘍, 蛔虫等も全く認められず, 剖検の結果, ヘパトームに起因した出血による胆道閉塞であることが判明した症例を経験した。本症例の如く高度の胆道閉塞症状が胆道内出血, 肝臓の脱落壊死片によつて惹起されることは文献に徴しても極めて稀れである。

## 昭和29年1月例会

## (1) 胃切除後空腸上部に発生せる重積症の2例

丹 信 敏

症例(1)は胃癌の診断のもとに胃全切除, 結腸前ビルロート第2法を施行したが, 術後自然排便なく, 吃逆を来し, 8日目開腹の結果, 輸出脚の180度捻転によるものであつたが, 更にその後9日目再び通過障害を来たし, 開腹の結果, ブラウン氏吻合部より80cm 肛側の部に腸重積を形成していた。

症例(2)は穿孔性胃潰瘍のもとに胃全切除を施行, 術後28日目通過障害を認めたので, 再手術の結果ブラウン氏吻合より17cm 肛側の部に腸重積形成を認めた。

胃切除後の本症の発生は腸管自体の過敏性及び移動性, 並びに内容の部分的停滞, 炎症による限曲性の腸管癒着等が相重なつて, その誘因となるものではなからうか。

## (2) 甲状腺腫の頭蓋骨転移

西村省三

48才の主婦で, 20年間静止状態に, 且つ無症状に経過していた甲状腺腫が頭蓋骨に転移し, 3年間に招手拳大となり, 同時に両肺にも転移を来した1例を経験した。組織学的検査の結果, 膠様質甲状腺腫であり, 癌性変化は示していなかつた。尚ナイトロミン, B-アザグアニンは殆どみるべき効果をも示さなかつた。

追加

石上 浩一

## (10) 十二指腸乳頭部癌の1例

越智幸雄

本症に必発するといわれる黄疸をみることなく, 十二指腸乳頭部に発生した癌腫に対し, 膵頭, 並びに十二指腸切除を施行した1例を報告し, 文献の考察を加えた。

## (11) 総腸間膜症及び十二指腸憩室を伴える胃癌の1例

足立道五郎

空腹時の心窩部疼痛を訴える患者をレ線学的に検査した結果, 術前既に胃癌, 総腸間膜症, 十二指腸憩室の存在を知り得たが, これに対し胃切除術(ビルロート第2法), 及び十二指腸憩室切除を行つた。然るに術後レ線学的検査により空腸輸出入脚は長軸方向に緊張強く, ために残胃が強く拡張していることを認めた。従つて憩室の鑑別にはその可動性を検査することが本症例に徴しても重要なことであることを知ると共に, 総腸間膜症のある場合の胃切除術式としてはビルロート第1法が優るものと論じた。

## (12) Baastrap's Disease の発痛機転

山田 憲 吾

癌細胞が骨転移, 而も広汎に骨転移を来たすに反し, 他の臓器, 組織に転移を来たす事は稀れであるという事実は注目すべきで, Schmorl, Borak のいう様に, 骨髓の化学的環境が遊離癌細胞の増殖に好適であるのではなからうかとの説明は, 最近の前立腺癌, 乳癌, 骨等のフォスファターゼに関する研究等から最も妥当なものと考えられる。

## (3) 離断性軟骨炎の3例

堤正二, 中脇正美, 山本忠治, 他2名

何れも肘関節に発生したもので, 内2例は上腕骨小頭, 他の1例は上腕骨内側に発生したもので, 何れも左官業, 家具職, 高校野球選手という様に3例共外傷の病歴を有するものであつた。内1例に対し手術施行, 即ち骨端炎の理論に従い, 関節小体摘出後の凹窩を十分に搔爬の上, 腸骨骨片の移植を行い, 術後5ヶ月の今日, 臨牀的, レ線学的に良好な成績を収め得た。

## (4) 第2ケーラー氏病の1例

山田栄, 中脇正美, 堤正二, 他2名

24才の農婦の右第3中足骨骨頭に発現し, レ線学的に Axhausen の第Ⅲ期に属する第2ケーラー氏病であることを確認し得た患者に対し, 観血的に遊離した米粒小体の摘出, 並びに中足骨骨頭部の一部切除を行い, 1ヶ月に亘るギプス固定と以後のマッサージにより, 疼痛, 腫脹は全く消失した1例を報告す。

## (5) 頭部皮角の1例

吉友睦彦, 山田正, 谷 裕

最近60余年に亘り存在した頭部の脂漏性湿疹による癬痕を基盤として、約6年前より発生した高さ9cm、直径8×7cmの真性皮角の1症例を経験した。

本邦文献52例に就いてみると80%に於て男性にみられ、年齢は40～60才に多く、発生部位的には頭部及び顔面に発生したもの24例で最多数を占め、次いで陰茎(17例)、四肢(11例)の順であつた。

## (6) 先天性肩胛骨高位症の1例

山本忠治, 中脇正美, 山田栄 他2名

著明な左肩胛骨の高位症のため、左上肢の運動制限のある1例を経験した。患者の叔父に先天性内臓肢を証明する事から、何れ先天性の素因があるのではなからうかと考え、本症の成因に就いて考察を加えた。

追加 木村忠司

肩胛骨を引下げるためには如何なる手術法を予定されて居られますか。

追加 青柳安誠

私共は経験がありませんが、肩胛骨を下げるためにはどんな方法がありますか。

追加 山田憲吾

肩胛骨の廻転を障碍する骨突出部を切除し、肩胛骨下隅へ M. serratus の如きものを移植して、機能的改善を図られればよいかと存じます。又 M. trapezius の附着部を移動させることも必要かと存じます。併し何れにしても症例に就いて充分筋学的解析を行えば、如何なる手術法が最適か解明されると存じます。

(7) 脳腫瘍に対するナイトロミンの使用  
経験

土屋涼一

脳腫瘍の患者2例に、術後ナイトロミンを使用し、その効果に就いて報告する。

症例(1)は右頭頂葉のアストロチトマで、手術によりその一部を切除し得た。そこで本症例では1日1回50mgのナイトロミンの静注を計24回行つた結果、比較的良好な成績を収め、自覚症状、並びに臨牀的所見の改善をみた。

症例(2)は右側頭葉のグリオブラストーマ・マルチホルメで、手術的に腫瘍の大半を切除し得た。更に術後ナイトロミンの静注を行つたが、白血球の減少著明なため、1日1回25～50mg宛計15回の注射を行つたに過ぎない。本症例ではみるべき効果は認められなかつた。

追加 木村忠司

(1) 一般外科領域でナイトロミンは癌には効かないが、脳腫瘍の場合、外胚葉性の腫瘍に効くというのはその間に腫瘍の性状に何か差異があるのではなからうか。

(2) ナイトロミンは麻酔作用を有するというが、脳

腫瘍への効果と関連して麻酔作用は起らぬか。

(3) 動脈注射の場合には葡萄糖でも腫瘍が縮少することがある。これは周囲の炎症、又は浮腫に効くのであろうが、この様な非特異的な効果とナイトロミン特異的な効果とを区別する必要がある。

追加

増田強三

ナイトロミンは腫瘍細胞の代謝過程の何処かに作用するものと考えられるが、殊に発育の早い悪性腫瘍では血管の分布も多いと思われるから局所に達するナイトロミンの濃度も高く、両々相俟つて効果を來たすものではなからうか。従つて斯る意味でナイトロミンの局所濃度を更に上げようとするならば動脈注射法は適切な方法であるともい得るであらう。

(8) 坐骨神経痛の注射治療中に発生した  
悪性腫瘍の1例

山本忠治, 中脇正美, 山田栄 他2名

41才の男子で臀部に外傷を受け、その後坐骨神経痛を招来し、ために打撲部に対し頻回に亘る注射を受け來た。然るに本患者に対し椎弓切除術を施行し、黄韌帯の肥厚を認めると共に、更に組織学的検査により臀部に発生した多型性細胞肉腫が主原因であることが判明した。従つて斯る場合の肉腫の発生機転に就いて注射自体によるものか、或は打撲に続発したものかどうかという点に考察を加えた。

追加

山田憲吾

(1) 坐骨神経と腫瘍の関係如何

(2) 黄韌帯肥厚症の際には坐骨神経痛が両側性に起ることが多いが、偏側性の場合には Foramen pyriforme 附近に発生した腫瘍によつて坐骨神経痛が招来される。従つて斯る条件も鑑別の項に入れるべきではあるまいか。

## (9) 火傷後発生した皮膚癌の3例

山田栄, 中脇正美, 堤正二, 玉重享

最近経験した難治性の火傷潰瘍部に発生した定型の扁平上皮癌の3例に対し、早期に観血的手術を行い、同時に植皮術を施行した結果、内2例では良好な成績を示し、他の1例は軽快後、再発し、ために左下肢切断術を施行するに至つた。

(10) 乳房に発生せる内被細胞腫の1例、  
及び最近20年間の外科第2講座に  
於ける内被細胞腫症例の臨床的観  
察

足立道五郎

58才の婦人、既往に接骨婦の歴史を有し、一度も妊娠した事がない。50才の時に月経は閉止している。3ヶ月前から右乳房内に無痛性鶏卵大の腫瘤を生じ比較的急速に増大し、且神経痛様疼痛を伴う様になり、入院数日前から心悸亢進及呼吸困難感を來していた。右

乳房は凸出し、その中に小児頭大の粗大結節状の軟骨様硬の腫瘤をふれ、その所々は稍軟化している。併し淋巴腺腫脹の著明なものはない。左胸腔には大量の淡黄透明の滲出液が潑溜している。逆行性乳房切断術により腫瘤を剔出したが、その組織像は淋巴管性内被細胞腫で左胸腔滲出液の中にこれと全く同一の細胞を認め、即ち腫瘍の多発性を示していた。最近20年間の当講座の内被細胞腫症例12例を見るに成書の記載と異り、腫瘍の多発性は著明でなく、腫瘍の転移が却つて多く見られた。剔出術後の再発は高率で(7例中4例)、患者の予後は甚だ不良で一回乃至数回の手術後、衰弱或いは転移等で死亡するものが多い。従つて早期発見及び徹底的剔除と廓掃が必要である。

### (11) 外科的にみた当地方の胆道疾患

吉友睦彦, 山田正, 谷 裕

昭和26年12月以後約1年10ヶ月の間に当院外科で胆道疾患として入院、手術を行つた25例の患者について報告し、若干の考察を加えてみた。この中11例が手術時実際に胆石のみとめられた真性の胆石症で、他は殆んど胆石症様の症状を呈して胆石の認められなかつたものである。後者の大部分は手術時何等かの炎症性変化が胆嚢、胆道にみとめられ、これによつて疼痛が惹起されたと思われるが、この中4例は胆嚢、胆道にも殆んど炎症性変化もなく、膵頭部の炎症性硬結、胆道周囲の淋巴腺腫脹が特徴的であるが、尿中ヂアスターゼの著明な増量のみとめられる点から、主として膵頭部硬結による鬱滞性胆嚢炎と考えられる。この点に関しては更に研究をすゝめたいと思う。

### (12) 虫垂炎様症状を呈せる肝炎の2例

半 田 肇

流行性肝炎の経過中に恰も急性虫垂炎を思わせる症状を呈し、間違つて開腹術を行つた2例を経験した。第1例は28才の女。発病第2、第3病日の黄疽前期に来院。廻盲部の圧痛、その部のデファンス、白血球増多のある点より開腹したが虫垂に異常はなかつた。術後第4日目頃より明かに肝炎を疑うべき所見を呈して来た。第2例は34才の女。発病第6、第7病日の黄疽期に来院。廻盲部の圧痛、その部のデファンス、白血球増多のある点より開腹したがこれ又虫垂に異常なく、大網、腸管全体に亘り軽度の黄染を認めた。

以上2例の肝炎りの仮面性虫垂炎に就て報告し、

併せて肝炎に伴つて来る右下腹痛の原因に就て考察を加えた。

### (13) 仙腸関節結核に対する病巣廓清術と骨移植の検討

桐田良人, 藤田英和

私共は日本外科宝函第22巻第2号誌上で教室の中島と共に『仙腸関節結核に対してはそれが鎮静期であれば、如何なる症例に対しても、ストマイ使用下に病巣廓清術を行い、同時に生じた死腔に同大の海綿骨を移植することが最も優秀であり、且つ合理的である』ことを強調した。その後症例を重ね、死腔をそのまま無処置としたもの2例、有茎性筋肉嚢充填を行つたもの3例、骨屑充填術3例、海綿骨移植術6例、計13例に就いて最長3年半に亘る遠隔成績を調べた。

その結果、無処置のもの、及び筋肉充填術を施行したものでは1例を除き、他は何れも術後2年以上を経過しているにも拘らず、多少共局所症状を呈し、レ線学上骨硬化弱く、骨欠損部は狭少とならず残存している。且つ術後20ヶ月しても尙社会生活を営むに至つていないのに反し、骨屑充填術及び海綿骨移植術の場合は術後半年もすれば、局所症状は全く消失し、レ線学上でも骨硬化著明で、骨欠損部は狭少となる。術後6ヶ月で病床を離れ、1年もすれば社会生活に復帰して居り、従来の保存的、観血的療法とは全く比較にならない程優秀な成績を収めるに至つた。

追 加 山 田 憲 吾

化学療法剤が普及した今日、病巣廓清術と同時に骨移植を行つた場合、将来の問題として移植骨の活着不全を招来するような場合も少しとされないように思う。それで骨移植を行つた場合、常に成功させ得るような基準を求めようとするならば、何処に目標を置いたらよいか。何となれば骨癒合による治癒が最も望ましい治癒形式と考えられるから。

追 加 近 藤 鋭 矢

骨関節結核に対しては手術を前提としないで、みだりにストマイ等の抗生物質を使用しない様に。

最近簡単に使用したがる傾向にあるが、抗生物質のために Narbige Schrumpfung 等が促進され、色々の障害を残すことが多い。

### (14) 生活腫瘍細胞の観察

武 田 進

## 次 号 予 告

## 綜 説

題 未 定.....白 羽 弥右衛門

## 原 著

Fatty Liver Following Total Pancreatectomy: Experimental and Clinical  
Studies.....Hideo Aoki

蛋白代謝の面より観た経静脈性脂肪輸入に関する研究.....塚 田 朗

## 臨 床

Baastrap's Diseaseの 発痛機転.....山 田 憲 吾  
仙腸関節結核と骨移植.....桐 田 良 人  
筋力による脊椎棘突起骨折に就いて.....赤 星 義 彦  
顎関節並びに脱臼の手術成績.....堤 正 二

## 症 例 報 告

中 脳 血 管 腫.....西 田 三 郎  
高度なる肺気腫の 1 例.....林 培 夫 他  
右上腕骨肉腫と誤りたる悪性副腎腫の骨転移.....日 高 輝 男  
骨形成不全症の 2 例.....栗 尾 梧 老  
離断性骨軟骨炎の 3 例.....堤 正 二  
7 種類の内部畸型を有する 1 例.....岡 田 守

## 会 員 動 静

安 富 徹	京都市伏見区深草東伊達町七一
請 田 安 夫	京都市中京区西ノ京伯楽町一八 西田重雄方
大 場 一 誠	大阪市南区鰻谷東之町三八ノ七
山 添 善 朗	三重県北牟婁郡尾鷲町南浦四七二 町立尾鷲病院
五郎川 正 己	大阪市北区南同心町二ノ一七 関西電力健康保険組合病院
藤 田 龍 五 郎	富山県下新川郡桜井町 下新川厚生病院外科
福 山 精 三 郎	西ノ宮市門戸東町五八ノ二
岩 井 鉞 二	名古屋市千種区鍋屋上野町清明山 県営アパート 六二二
堀 井 政 太 郎	和歌山県東牟婁郡古坐町 古坐川病院
栗 尾 梧 老	松江市母良町二〇〇 松江日赤整形外科
森 益 太	新潟県高田市本町一丁目 高田中央病院

## 編 輯 後 記

○本号に掲載する予定であつた大阪市医大臼羽教授の  
綜説は都合で次号に掲載することとなつたので御了  
承賜り度い。

○新たに校正陣を強化し、発行期日を厳守すると共に  
出来得る限り誤植を少くするという意味で編輯員の  
一員に加えられたにも拘らず、果してその意図を充  
分に察知、御期待に副い得たものかどうか。出来得  
る限りの努力はしたものの全く心配な事である。

○いつもの事乍ら原稿提出の非常に遅れる方、又校正  
刷になつてから、文章の組替えを申し出られる方が  
あり、思わぬ手間をとります。又文献の記載方法が  
まちまちであり、特に雑誌名の巻数は必ずゴチツク  
体で記して載き度いと存じます。この点今後共投稿  
者の御協力を切望致します。

○終りに不慣れな私に校正、その他御援助を賜りまし  
た星野列、藤田栄隆、増田強三の三講師に謝意を表  
します。

(日笠頼則記)